

宿縁

三月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 0477-372102
FAX 0477-372102

仏の智慧を受信して 利他の発信を生む



長引く新型コロナウイルス感染拡大による蔓延防止期間の延長に誰もが憂鬱さを感じ、だからこそ誰もが暖かな春の季節を待ちわびているさなかに逆行するかの如く暗いニュースが世界から飛び込んできました。
ロシアの軍隊がとうとう隣国ウクライナに侵攻したという号外です。
話し合いによる解決がいに破綻して、武力を行使しなければならぬ事態に陥った戦争は最も避けなければなりません。
この出来事を日本から遠く他国の問題と見過ごすことはできません。同じ人間同士

殺し合いが始まったのです。命のつながっている一人ひとりが何かの形で戦争に至った責任があるからです。宇宙でたった一つの存在である地球が他の星からどう見られているのか、宇宙空間から初めて地球を眺めた宇宙飛行士の感動の言葉を思い出してください。

「暗黒の中に浮かぶ青い地球にはどこにも国境はなかった！」

知らず知らずに自分色に染めようとする自分中心の物の見方を気づかせてくれるモノサシを持つか持たないかで、人の生き方は大きく変わってしまいます。

二月十五日は「涅槃会」(ブツダ釈尊ご入滅の日)です。入滅とは涅槃に入ること。苦しみの原因である煩惱に揺れ動いて止まない状態から脱し絶対的静寂に達した状態をいいます。万人の達するべき境地(真理)を説かれた釈尊の涅槃会の月にこのたび殺し合いのおぞましい戦争が始まったことは本当に悲しいことです。

歴史を思い出してください。世界中を悲劇のどん底に巻き込んだ第二次世界大戦、日本がその戦争に加担した日は昭和十六年十二月八日でした。十二月八日、この日は「成道会」(釈尊がおさとりを開いた日)です。偶然とはいいながら仏教徒にとって聖なる日が汚されたのです。

ここで釈尊の言葉を思い出してみよう。「真理のことば」(ダンマパダ)第十章「暴力」について、

『すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。』
『すべての者は暴力におびえる。すべての(生きもの)にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。』

『愚かな者は、悪いことを行なっても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかしその罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。』

別に解説は要らないと思いますが濃い線の部分が大切だと思えます。暴力を眺めているのではなく、他人のことではなくて自身に暴力にあい暴力をふるった様を考えなければなりません。そして蜜のように思いなすとは、人間は悪を犯したことを正当化するという、即ち甘い蜜に酔いしれる性(さが)を持つているということ、そして自らの行為が間違いであったと知らされたときはもう遅いことを知るべきです。

他に向けてごぶしを上げたら、そのごぶしをおろすすべを知らないのが人間の浅ましさです。

戦争をしておののき傷つくのは、いつも何も知らない子どもたちです。偶然にこの世の生を受けてこれから生きる権利がある子どもたちのいのちを奪うことほど罪の深いことはありません。

使う言葉です。

一人の誤った指導者によって多くの人が死に、全生命が滅びるのです。その指導者を選んだのは誰か?ではなく、責任の一端は一人ひとりにもある、それを仏教では共業(ぐうごう)といいます。

かつて日本は戦争を起こし、取り返しのない悲劇を経験しました。勝者も敗者も共に深い傷を残しました。

終戦後に勝者による裁判で日本はたくさん若者たちが無念の気持ちで裁かれ愛しい子を妻を親を残して死んでいきました。あの巢鴨プリズンで最初に散った命は長崎出身の由利敬という二十六歳の青年でした。俘虜収容所長であった時の人道に対する嫌疑で、終戦の翌年四月に命を終えました。

由利敬は、母ひとり、子ひとりでした。ひとり息子を案ずる母ツルは裁判が行われている横浜に通いつめました。そしてついに事実を受け止め、息子を戦犯にしたのはおろかな「母の大罪です!」と、わが身を悔いました。大罪とは「息子が偉くなることをただ一つの願いとし軍人一心に養育した」ことでした。人間が良かれと思う裏にある悲しみの業を見落としてはなりません。

何事も数値で測る現代の在り方はまた危険です。「五十人百人ではなく、一人の死者でよかった」というような考え方こそ改めなければなりません。

今私たちは、あらゆるいのちあるものへ、やさしさを発信することが求められます。

「人が死んだあとに残るものは、集めたもの(自利)ではなく、与えたもの(利他)である」(ジェラルド・シャンドリ)

【寺灯雑記】

○シンポジウム「ともに生きる力」
2/23

浄土真宗本願寺派総合研究所が企画したシンポジウム(オンラインZOOMによる)「最期まで心豊かに生ききるー死の現場から見えてきたものー」が、この日午後1時半から5時半まで三人のパネリストの出演のもと開催されました。

パネリストとして大谷由香氏(龍谷大学准教授)が「仏典にみる安楽死・自死」、新堀慈心氏(あそかびハラー病院看護師)が「われわれからわれらへ」、そして当寺前住職が「死ぬいのちから生まれゆくいのちへ」と題し、三人がそれぞれの立場から講演しました。

オミクロン株の感染拡大によるまん延防止期間中となりオンラインのみになりましたが、関心度が高く100名程の会議への参加者があつたようです。

新型コロナウイルス感染症の猛威を一つのきっかけとして、私たちはあらためていのちのはかなさを痛感し、死生観の問い直しへの関心は高まりつつあります。

現代の日本における老病死に関わる諸問題に対して、仏教の教えが如何なる価値を発信し得るか、そして老病死の現実を心豊かに生き抜く学びを共にする有意義な場でありました。

【輝け！お寺の掲示板大賞】

毎年、公益財団法人の仏教伝道協会が主催し、ツイッターやインスタグラムに投稿された全国のお寺の掲示板の標語を、その内容の有難さ・ユニーク・インパクト等によって入

賞を決定する企画、「輝け！お寺の掲示板大賞」の昨年の入賞先品をいくつか、講評とともにご紹介いたします。

○仏教伝道協会大賞

「仏の顔は何度でも」

講評：「仏の顔も三度まで」ということがわざが世間に完全に定着しています。が、仏様はその程度で腹を立てるような方ではありません。阿弥陀仏は無限の慈悲を備えていらつしやいます。「仏の顔も三度まで」というより「仏の顔は何度でも」のほうが仏様の表現としては正確であることを知ってもらいたいというところで大賞に選ばれました。

○仏教伝道協会賞

「置かれた場所で咲けないときは逃げてもいいよ咲けるところへ」

講評：『置かれた場所で咲きなさい』という本が以前ベストセラーになりましたが、置かれた場所で結果が出ないことも当然あり、そのことで悩んでいる方々も現在大勢いるのではないかと思えます。私たちはたとえどこに逃げてても、仏様のお慈悲の中なのです。

「届いています！

南無阿弥陀仏の摂取券予約は不要
心配も無用」

講評：新型コロナウイルスのワクチン接種予約がなかなかできずに焦る経験をした方が非常に多かったと思えますが、阿弥陀仏の救いにはその心配がありません。予約をしな

くても救いはすでに届いているのです。

「本当のものがわからないと本当でないものを本当にする」

講評：安田理深師のことば。安田師にとつての「本当のもの」とは「仏様の智慧」です。現在様々なフェイクニュースが溢れ、多くの人々がそれらに振り回されています。このような時代だからこそ、仏教の教えを通して物事を判断し、自分自身の姿を見つめることが大切ではないでしょうか。

☆宿縁廟法要並びに彼岸会法要修行

*三月二十一日(祝日)

・一時より 宿縁廟法要(廟前)

お勤め「重誓偈」・焼香

※宿縁廟へご納骨のかたは十二時三十分までに受付をすませて廟前にお参りください。引きつづき

・一時三十分より 彼岸会法要(本堂)

お勤め「讚仏偈」

法話：佐々木閑先生

(京都花園大学教授)

講題：「現代人のためのブツダの教え」
講師にはNHK Eテレ等で著名な佐々木閑先生にお越しいただきます。

とてもわかりやすく仏教をお話してください。ありがとうございます。縁を是非結んでください。

やつと暖かな陽気が訪れました。

自然界の木々はそれに応えるように芽を出し、花を咲かせて大空へ両手を広げてい

るようです。

彼岸会は古来から引き継がれたみ仏の教えをいただき、今ここに生きる身のよろこびを感謝する尊い仏事です。どうぞご家族ともどもご参詣ください。

【三月の法座の案内】

○婦人会法座

*三月五日(土) 一時

「ご文章に学ぶ」

唄おう「仏教讃歌と童謡」

座談会

○教行信証を学ぶ

*三月二十六日(土)

「証文類」(阿弥陀仏の浄土に生まれるとはどういうことなのか)

○本堂で個別の彼岸会読経を受付ます

三月二十日(日)に本堂で個別に彼岸会の読経をご希望の方はお申し出ください。

◎慶讃法要団参募集中！

令和4年、西本願寺本山で修行される「親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年記念慶讃法要」に5月8日(10日)泊三日で団体参拝をいたします。ご勝縁に参加ご希望の方はお申し込みください。

【二月の掲示板のことば】

みんな
誰かに
愛されて育った